

阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）

藤 沢 敦

1. はじめに

古墳時代の研究において、古墳という墳墓に表現された政治的・社会的関係とその変化を考察するために、ある限定された地域内の墳墓の動向を探るという方法は、一つの有効な方法であろう。筆者も、東北地方の古墳時代研究のケーススタディとして、宮城県南部の阿武隈川下流域をフィールドとして調査を継続している。本論では、当地域の前方後円墳について、新資料の紹介を行うとともに、若干の検討を行いたい。ただ紙幅の関係から、この地域の前方後円墳の全てを、一度に取り上げることは難しいため、今回は北半部の村田町・蔵王町・大河原町所在の前方後円墳について検討する。南半部の白石市・角田市・丸森町所在の前方後円墳については、稿を改めて検討したい。

2. 阿武隈川下流域の前方後円墳の分布

阿武隈川は福島県中央部を南流し、福島盆地から、阿武隈山脈の北端部を横切るようにして、宮城県域に流入する。この狭窄部より下流の、宮城県域を阿武隈川下流域と呼ぶこととする。現在の行政区分では、柴田町・大河原町・村田町・蔵王町・白石市・角田市・丸森町の2市5町にわたる地域である（註1）。阿武隈川には、白石川を初めとするいくつかの支流が合流し、これらの河川流域には、盆地が連なっており、さらに小地域に区分することが可能である。

この阿武隈川下流域では、合計130ヶ所の古墳・古墳群・横穴墓群が知られており、東北地方の中でも、古墳分布が濃密な地域の一つである（藤沢敦 1998）。その中で前方後円墳は、11基が確認されている。これ以外に、前方後円墳の可能性が指摘されているものが3基存在するが、確実ではない（註2）。これらに帆立貝形古墳を含めた一覧を、表1に示す。この内の6基が、村田町とその周囲に集中している（図1）。村田町は、白石川の支流である荒川沿いに開けた小盆地にある。ここでは、この小盆地を便宜的に村田盆地と呼ぶこととするが、この盆地内と、白石川流域の平地から村田盆地への入り口にあたる場所、盆地の西端を南北に連なり、西隣の蔵王町（円田盆地）との境界をなす丘陵尾根上に、前方後円墳が存在する（図2）。東北地方では小地域に1ないし数基の前方後円（方）墳が存在するだけの地域が多いが、当地域は、前方後円（方）墳が比較的集中して分布する、数

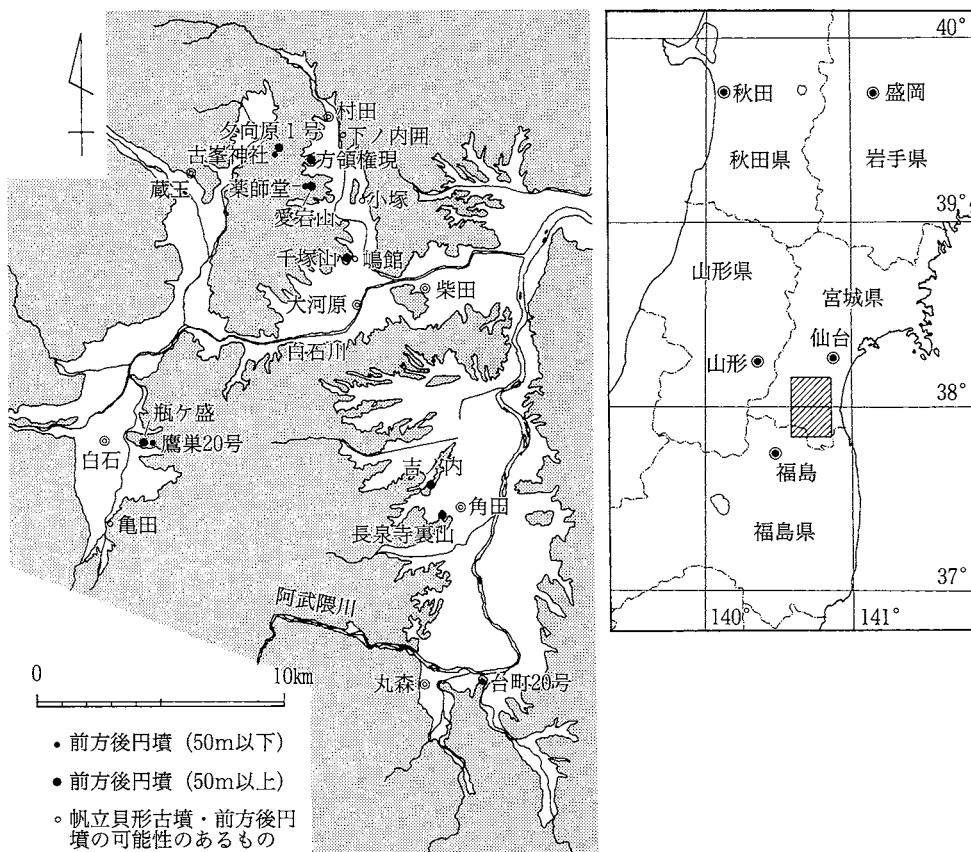


図1 阿武隈川下流域の前方後円墳の分布

古墳名	所在地	墳形	規模	備考
愛宕山古墳	柴田郡村田町閑場字愛宕山	前方後円墳	90m	埴輪・葺石
千塚山古墳	柴田郡村田町沼辺字千塚	前方後円墳	85m	
吉ノ内古墳 (横倉7号墳)	角田市横倉字吉ノ内	前方後円墳	約70m	
長泉寺裏山古墳	角田市角田字長泉寺	前方後円墳	65m	
方領権現古墳	柴田郡村田町薄木字金原	前方後円墳	64m	造り出し
夕向原1号墳	柴田郡村田町薄木字夕向原 刈田郡藏王町平沢	前方後円墳	57m	
瓶ヶ盛古墳 (鷹巣12号墳)	白石市鷹巣	前方後円墳	56m	埴輪・葺石
亀田古墳	白石市斎川字弥平田	帆立貝形古墳	42m	埴輪・葺石
古峯神社古墳	柴田郡村田町薄木字由ヶ沢 刈田郡藏王町平沢	前方後円墳	38m	
嶋館古墳	柴田郡大河原町字千塚前	前方後円墳?	約35m	
薬師堂古墳	柴田郡村田町閑場字愛宕山	前方後円墳	28m	
台町20号墳	伊具郡丸森町字台町	前方後円墳	27m	横穴式石室?
鷹巣20号墳	白石市鷹巣	前方後円墳	18m	
下ノ内古墳	柴田郡村田町村田字下ノ内	前方後円墳?	不詳	埴輪
小塚古墳	柴田郡村田町沼辺字長塚	前方後円墳?	不詳	

表1 阿武隈川下流域の前方後円墳・帆立貝形古墳

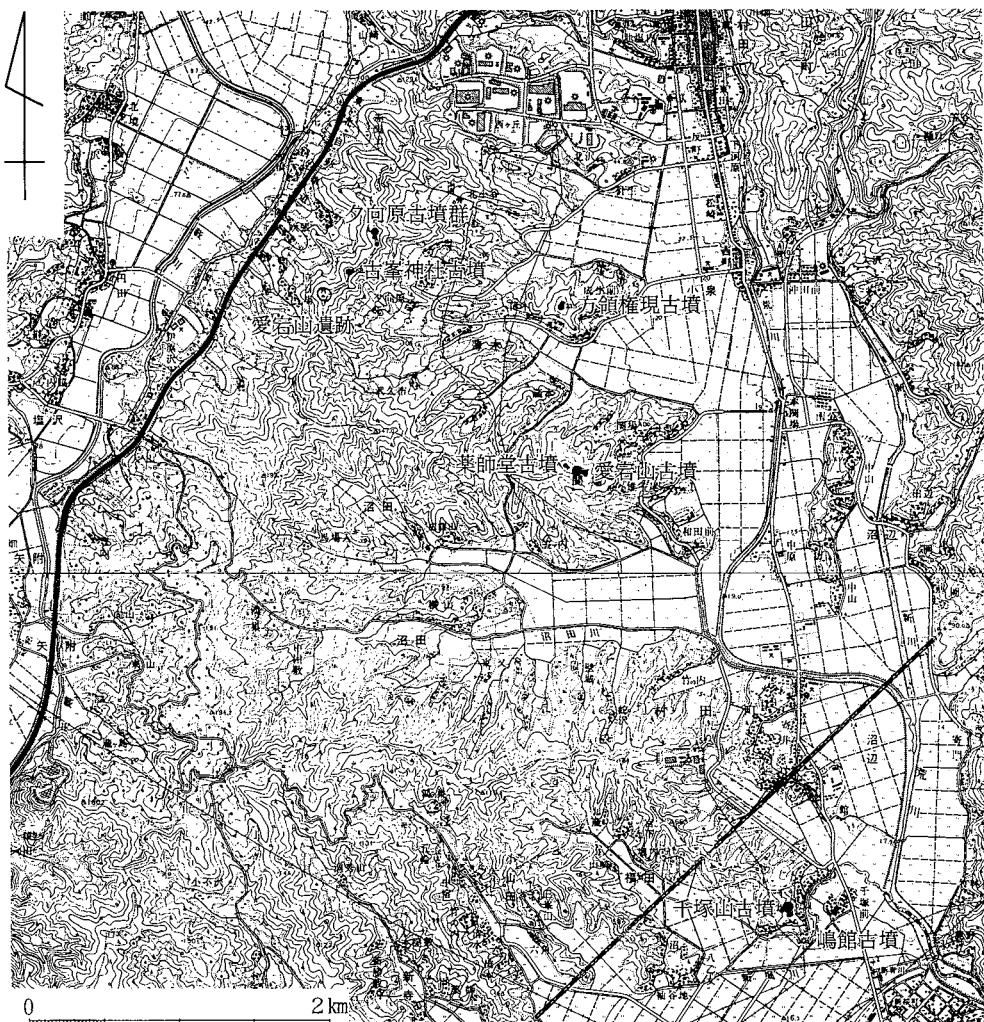


図2 村田町周辺の前方後円墳の分布

(国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「村田」「大河原」を利用)

少ない地域である。

また、この村田盆地を含む阿武隈川下流域全体の特徴として、前方後方墳が確認されていないことが指摘できる。東北地方では、前方後方墳が先行して出現し、前方後円墳へと移り変わる地域がほとんどであるが、会津盆地の一部とともに、前方後方墳が存在せず、前方後円墳だけで占められている。

筆者は、これまでにも踏査や測量調査などを行ってきたが、近年、新たな前方後円墳が確認され、測量調査を実施してきたので、その成果について、まず次に報告する。

3. 愛宕山遺跡・古峯神社古墳・夕向原古墳群の測量調査

ここに報告する遺跡・古墳は、村田盆地と円田盆地の境に南北に連なる丘陵の尾根線上に並んで立地している。この尾根線は、村田町と蔵王町の町境にあたっている。最も南側の愛宕山遺跡は、蔵王町平沢字愛宕山ほかに所在し、従来より弥生土器・土師器が出土することが知られていた（片倉信郎ほか編 1976）。この愛宕山遺跡は、最高所の標高が169mあまりと、東側の村田盆地の平地との比高差は140m以上、西側の円田盆地の平地との比高差でも90m程と、通常の集落遺跡とは考え難い立地である。土師器には、前期・中期のものが知られており、立地から削平された古墳の可能性も考えられる遺跡である。

この愛宕山遺跡の北東約200mのところに、古峯神社古墳が立地する。古峯神社古墳は、1993年に藤原二郎氏によって発見された。後円部墳頂に「古峯神社」と刻まれた石碑が立っていることから、この名前をとて、古峯（こみね）神社古墳と命名された。この尾根上では、従来古墳の存在は知られていなかったことから、その実態を明らかにするために、1996年の2月から4月にかけて、主に土日を利用して、筆者が調査担当となつて古峯神社古墳と愛宕山遺跡の測量調査を行つた。この調査中、更に北側の尾根線上を踏査した折に、古川一明・青山博樹の両氏によって前方後円墳と円墳が新たに確認された。古峯神社古墳の北北東、約200mのところである。こちらは字名をとて、夕向原（ゆうごっぱら）古墳群と命名された。そのため、同年11月から翌1997年5月にかけて、こちらも土・日曜日を使って、測量調査を実施した（註3）。

測量にあたつては、各古墳・遺跡それぞれに、その範囲を取り囲む形で閉合トラバースと結合トラバースを組み合わせた、トラバース網を設定した。国土座標の算出にあたつては、古峯神社古墳の後円部墳頂に三等三角点「薄木」が置かれており、ここからは四等三角点「藪川」のみが視準できたため、これによつて測線の方位角を確定して、各基準点の国土座標値を算出した。愛宕山遺跡と夕向原古墳群については、直接視準することが立木のため不可能であったため、開放トラバースを組んで、国土座標値を移動した。基準点の配置状況と測量成果は、図3にまとめて示す。レベルは三角点「薄木」を利用して、各基準点の標高を算出した。測量図は縮尺100分の1、25cmコンターで作成した。

以下に、各遺跡・古墳の調査成果について述べる。

(1) 愛宕山遺跡（図4）

愛宕山遺跡は、土師器が採集されることから、古墳が存在した可能性を考え、測量調査を行つた訳であるが、結果的には古墳の形状を留めているような部分は確認できなかつた。頂上部の地形は、神社の造成に伴うと思われる平坦地と、土壘状の高まりが確認できるが、古墳の存在を示すような地形は認められなかつた。

三角点	國土座標		標高 (m)
	X座標	Y座標	
蕨川	-209 392.85	- 12 476.96	86.97
薄木	-210 731.00	- 11 531.39	168.66

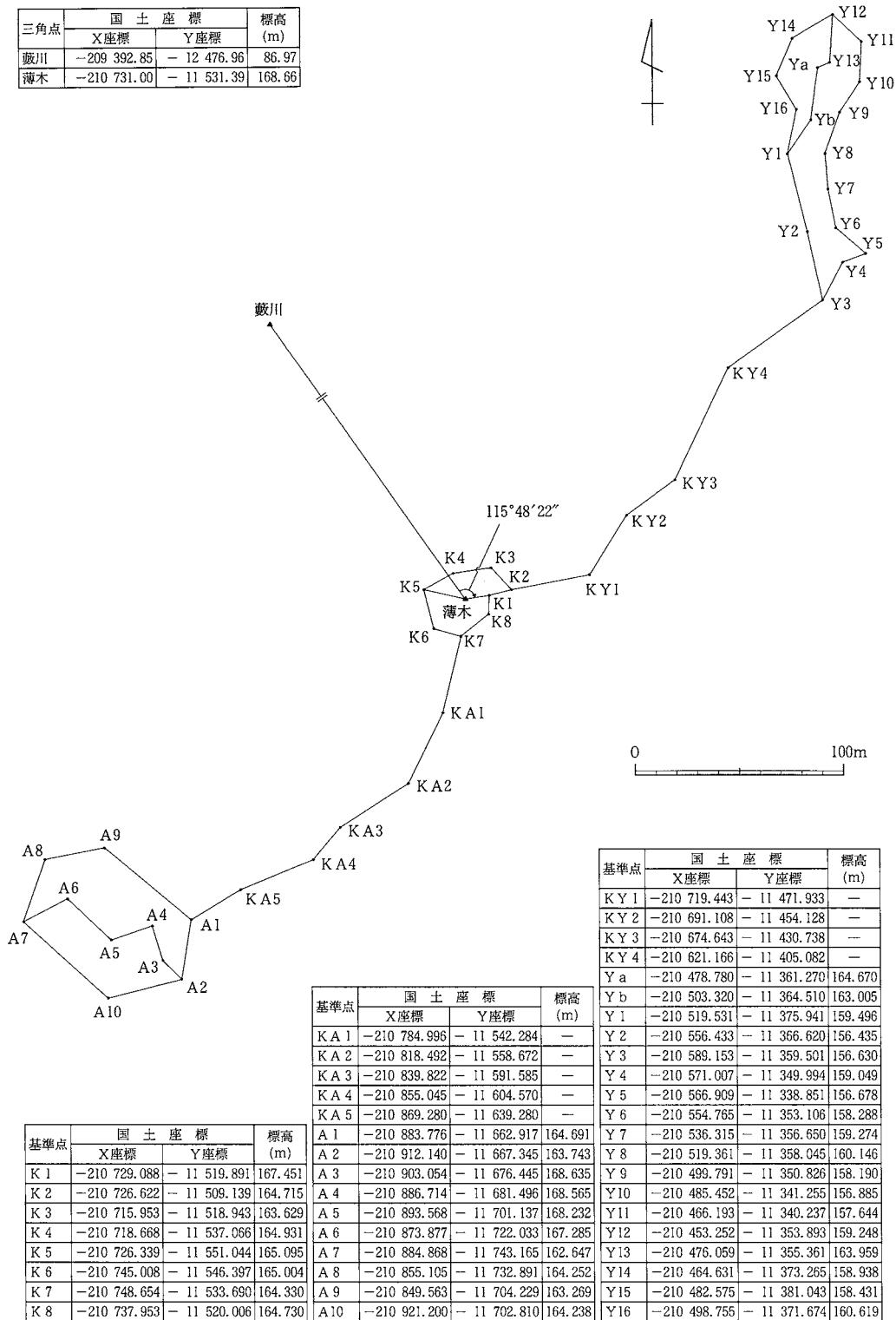


図3 測量基準点配点図と基準点測量成果

6 阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）

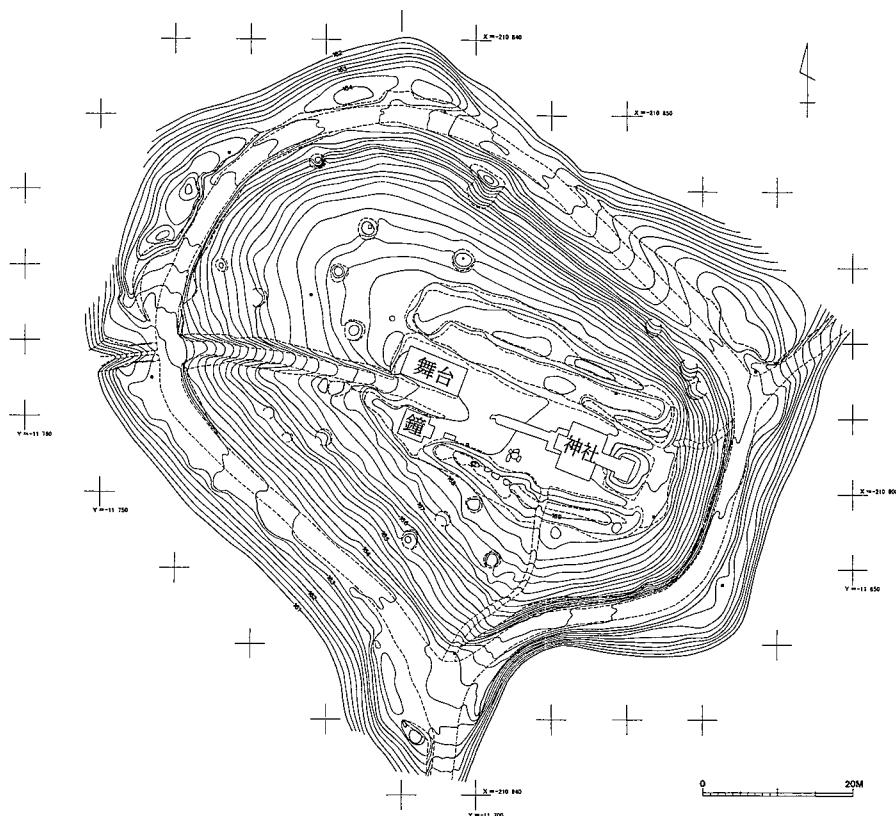


図4 愛宕山遺跡測量図

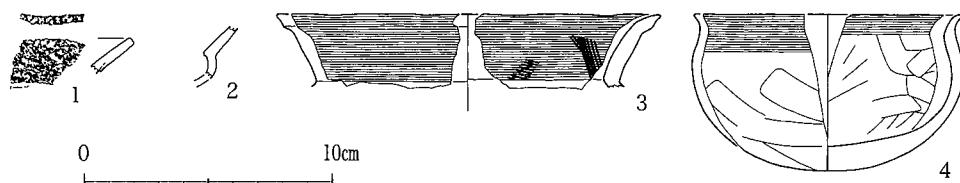


図5 愛宕山遺跡採集遺物実測図

愛宕山遺跡では、弥生土器・土師器が採集されている。ごく一部を除くほとんどの資料は、神社本殿付近から、鐘撞き堂・舞台にかけての一帯で採集されている。採集資料のほとんどは、土師器の甕あるいは壺の体部破片で、特徴が判明するものは少ない。主要なものについて、図5に示した。

1は、口縁部外面と口縁端面に縄文を施す、複合口縁壺である。弥生時代後期か庄内式並行期のものであろう。これ以外に、縄文を施した体部破片も存在し、弥生土器と考えられる。『白石市史別巻考古資料編』では、十三塚式と天王山式とされる土器破片が写真で紹介されている（片倉信郎ほか編 1976）。2～4は土師器である。2は、小片のため断面図

しか図示できなかつたが、小型丸底鉢である。これは、他の資料とは異なり、舞台の西側の、参道の部分で採集したものである。3は、甕の口縁部である。これ以外にも、小破片のため図示しなかつたが、明らかに異なる個体の甕の口縁部が2点存在する。この2・3は、古墳時代前期の塩釜式に属するものである。4は、丸底の坏である。これも、他の資料とは異なり、神社本殿の南側の、周囲を取り巻く道路によって削平された部分で採集したものである。古墳時代中期の引田式期のものと考えられる。したがつて、土師器には、異なる時期のものが存在することとなる。これら以外に、図示できなかつたが、高坏か器台の脚端部、直口壺と思われる小破片が存在する。また、かなり薄手の甕の体部があり、土師器の主体は、塩釜式であると考えられる。

前述のように、愛宕山遺跡はその立地から通常の集落遺跡と考えることは難しい。弥生土器の存在をどのように考えるかが問題として残るし、土師器も複数時期の資料があるため、解釈に苦慮する。しかし土師器の存在からは、古墳以外の遺跡を想定することは難しい。そうであるとすると、比較的小規模の古墳が存在し、神社建築に伴う改変が大きく、本来の形状は失われてしまっている可能性が考えられよう。

(2) 古峯神社古墳（図6）

古峯神社古墳は、北北東からのびてきた尾根が、少し方向を変えて南南西に向かうところに立地する。北西側にも派生する尾根が存在し、この両者が合流する場所を後円部として利用している。ちなみに、この北西側へのびる尾根を下っていくと、古墳時代前期の集落である大橋遺跡に至る。

前方部北側コーナー付近は、他の場所の墳裾より一段低いところに平坦面があり、畑に利用されたことがあつたためと思われる。これ以外の場所では、現状で確認できる墳丘裾は、標高165m前後でそろつており、墳裾のレベルをあわせて築造されている。特に、南側くびれ部は、本来の形状を良く留めていると思われ、墳丘外側に平坦面が明瞭に確認できる。現状の墳裾の位置では、主軸長は39mになるが、後円部後端側は、墳頂までセンターが大きく乱れており、かなり墳丘が崩壊して流出していることは確実である。前方部も両コーナーが流出のためか丸みを帯びている。そのため、保存の良好な部分を利用して墳形を復元すると、図11に示したような形態が想定できよう。この墳形推定に基づく規模は、主軸長38m、後円部径26m、前方部長14m、くびれ部幅16m、前方部前端幅16m、後円部高さ3.5m、前方部高さ2.5m、後円部と前方部の比高は前方部側が1m低い。後円部墳頂は、流出による変形が大きいため判然としないが、径11m程度になるであろう。主軸方向は、N-67°-Eである。段築・葺石・埴輪は認められておらず、埴輪以外の遺物も知られてない。

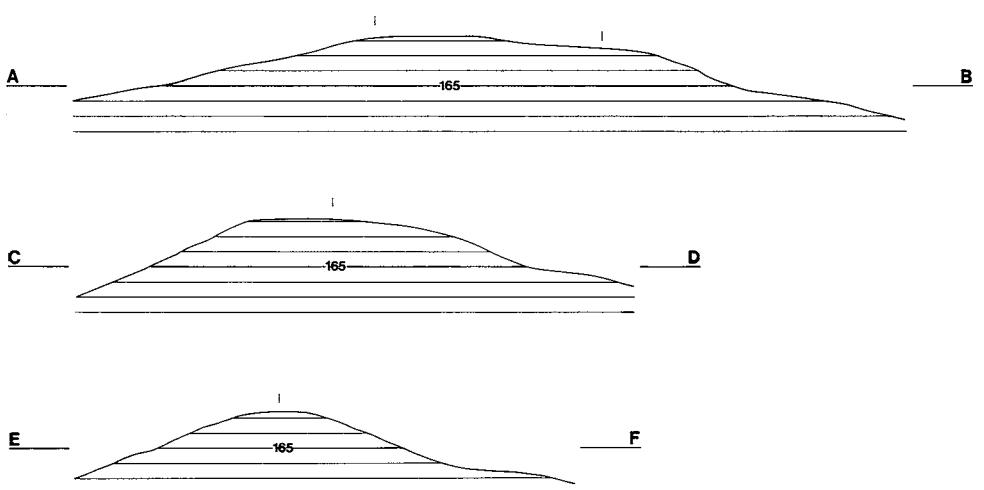
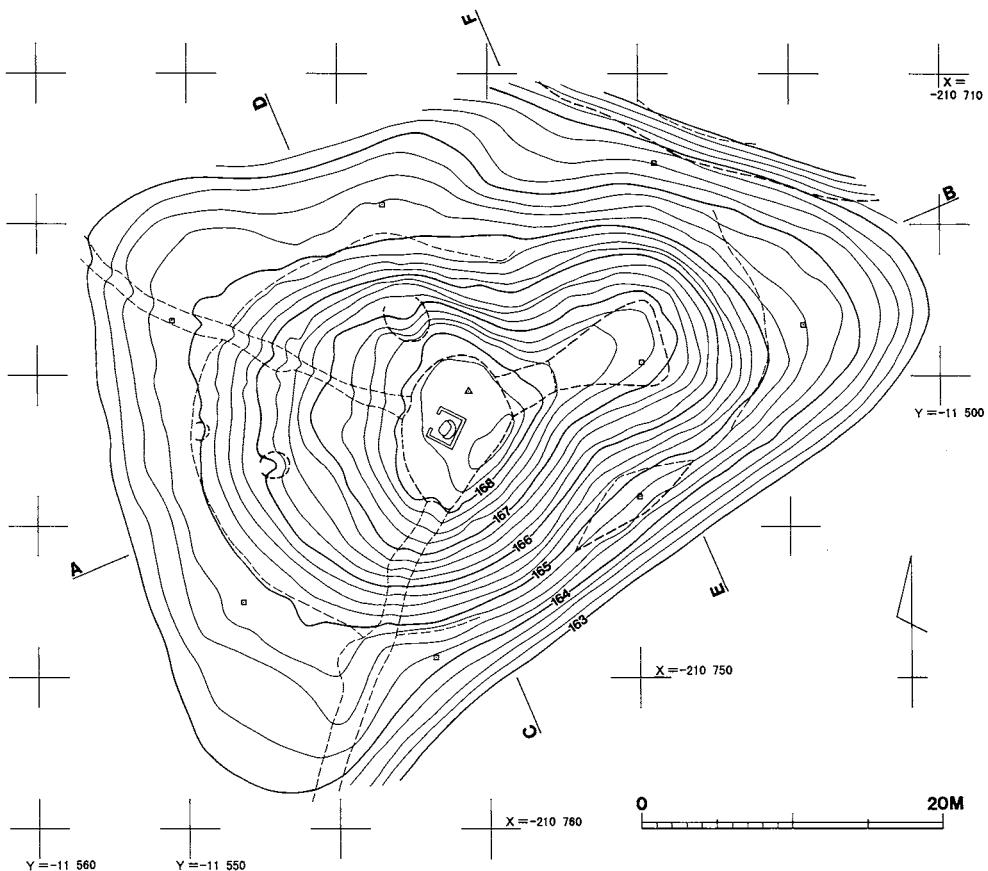


図6 古峯神社古墳測量図

(3) 夕向原古墳群 (図7~10)

夕向原古墳群は、古峯神社古墳の北北東200m程のところに立地し、前方後円墳1基、その南側に円墳と思われるもの1基からなる。この尾根線上については、更に北側まで踏査を行ったが、北に150m程行ったところで、塚状の高まりが1基確認されたが、周囲が人工的に改変されている場所であり、確実に古墳と見なすのは難しいと判断した。

夕向原1号墳は、南北にのびる尾根上に造られているが、この南北の尾根から北東に派生する尾根の合流する場所を後円部に利用している。後円部の後端付近と前方部の前端には、溝が明瞭に確認できる。これ以外の場所でも、ほとんどのところで、墳丘裾と考えられる傾斜変換線が確認できた。後円部の後端付近から後円部西側にかけての墳裾は、標高159m前後ではほぼ一定している。しかし、後円部後端付近から後円部の東側に向かつて、墳裾の標高は下がっていき、主軸にほぼ直交する部分では、標高157mと後円部後端の墳裾より2mも低いところに墳裾がある。この最も低い部分から東

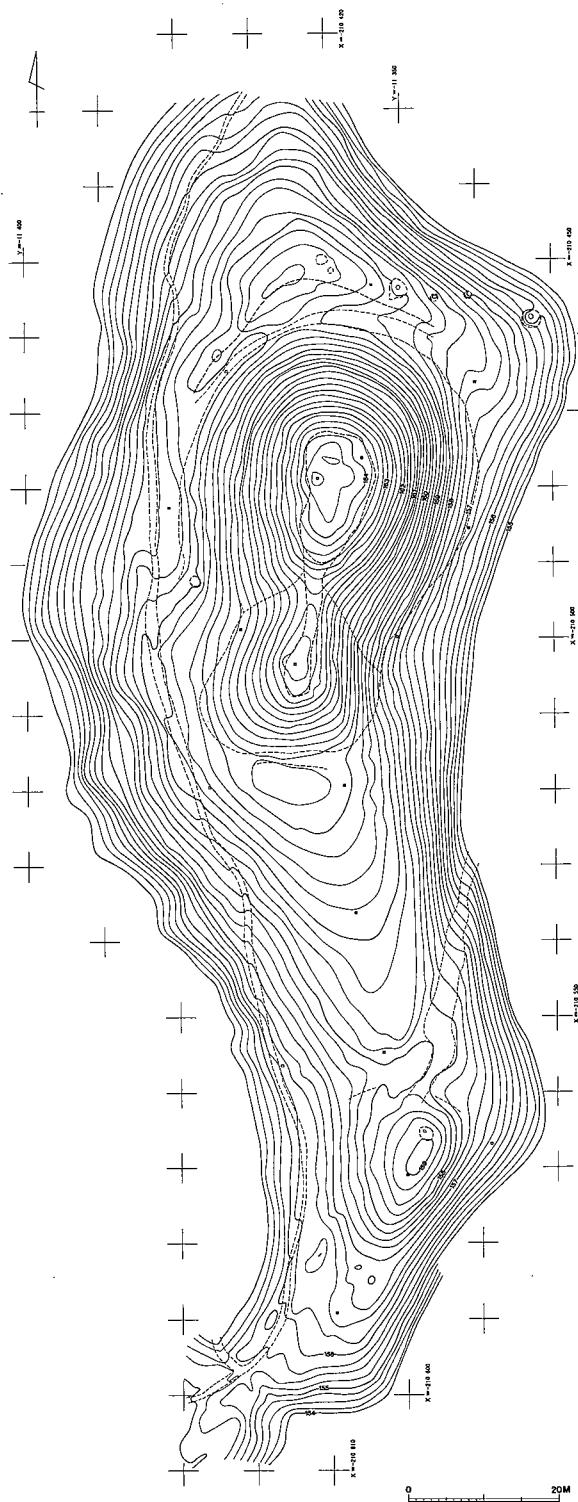


図7 夕向原古墳群全体図

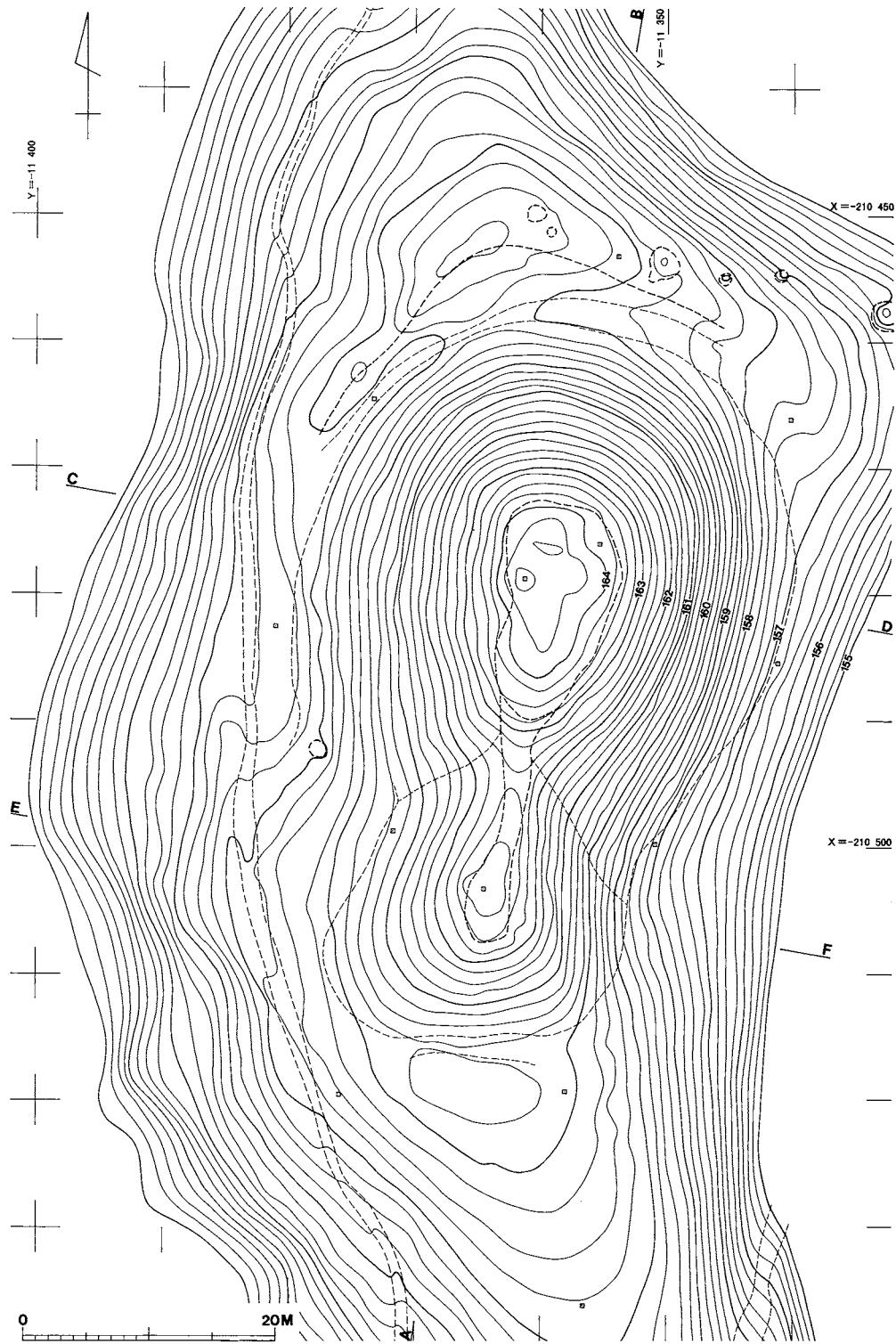


図8 夕向原1号墳測量図(1)

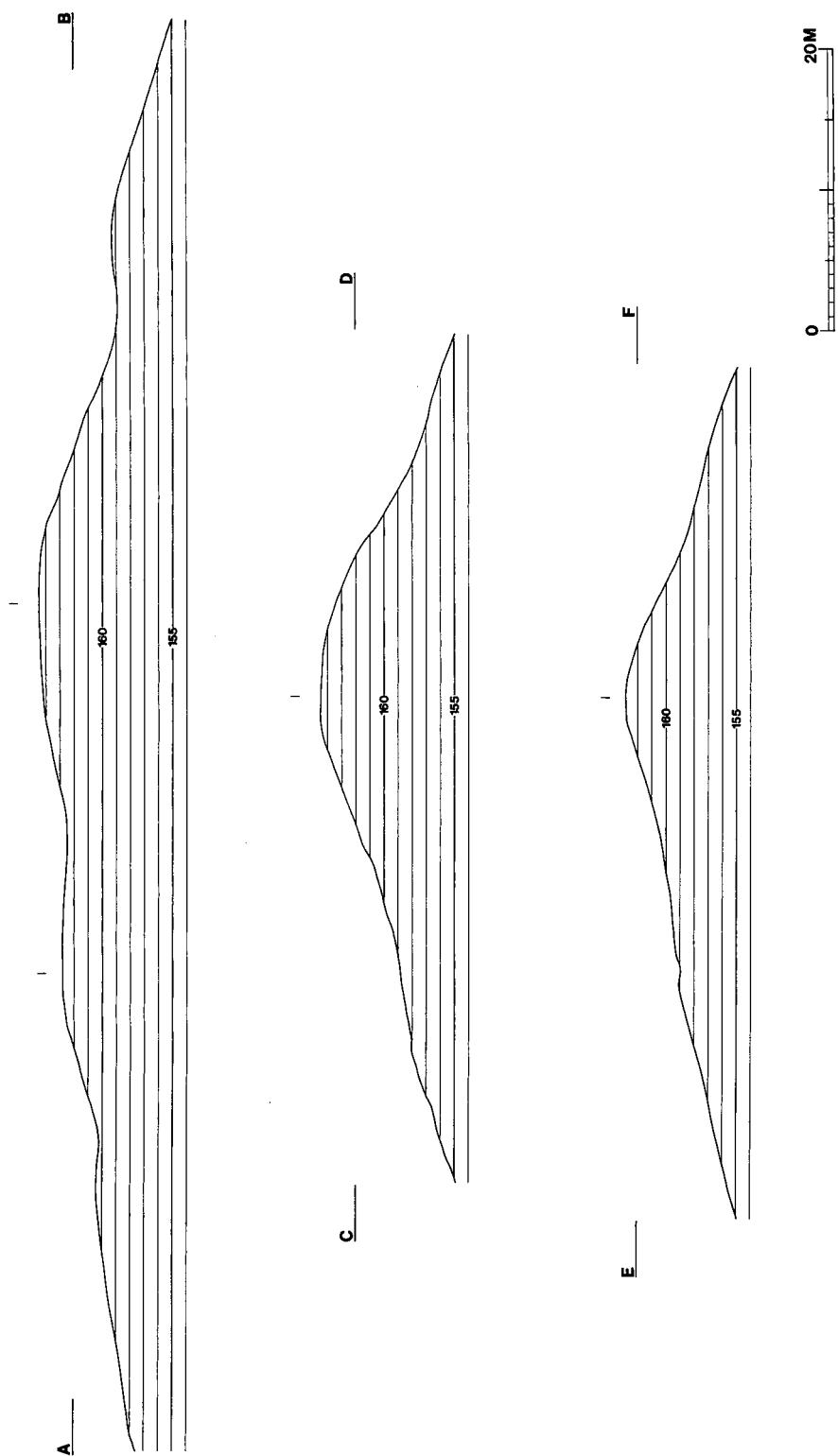


図9 夕向原1号墳測量図(2)

側くびれ部に向かって、墳裾の標高は次第に高くなり、くびれ部から前方部東側では、標高158.5mから159mのところに墳裾が確認できる。さらに前方部前端に向かって、墳裾の標高は高くなり、前方部前端では160.25mのセンター付近に墳裾がある。前方部西側コーナーから西側のくびれ部にかけては、160～160.5m付近に墳裾があり、前端とほぼ同じ高さである。西側くびれ部から後円部西側に向かって、再び墳裾は下っていき、159m前後のところに墳裾がまわっていく。このように墳丘の基底レベルが、後円部東側が最も下がっていることは、東側の村田盆地側を大きく見せるための工夫と考えられる。

調査結果をもとに墳形を復元すると、図11に示したような墳形が想定できよう。現状のセンターの流れに従えば、前方部は左右不对称で、ややいびつな形状を呈する。この墳丘推定に基づく規模は、主軸長57m、後円部径38.5m、前方部長22m、くびれ部幅19m、前方部前端幅24m、後円部高さは後端から測ると5.5m、東側からは7.5mである。前方部高さは前端から測って2.5m、後円部と前方部墳頂の比高は前方部側が1.8m低い。

後円部の西側斜面から墳頂平坦面にかけて、センターが乱れており、この部分は土砂流出による崩壊が進んでいると考えられる。それ以外の部分では、大きなセンターの乱れもなく、墳丘の保存状況は比較的良好と思われるが、段築の存在を推定できるような場所はない。葺石・埴輪も認められない。後円部墳頂平坦面は、西側の崩壊ではっきりしない部分が多いが、径12m程度と思われる。前方部上の平坦面は最も広いところでも4m程度と狭いことが特徴である。主軸方向はN-170°-Wである。

2号墳については、東側の傾斜の強い部分は、土砂流出によって崩壊が進んだ結果と考えられる。北側の高い部分を切断するように、溝がめぐっており、これをもとに墳形を復元すると、図11に示したように、径24m程度の円墳として復元できるであろう。ただし、南側に高まりがのびており、これが前方部、あるいは造り出しになる可能性がある。この高まりの西側には、少し壅んだ部分が確認でき、これがくびれ部の存在を示すのかもしれない。そう考えると、前方後円墳、あるいは帆立貝形古墳や造り出し付き円墳となる可能性も考えて良いだろう。しかし、前方部とすると、明確な前端が認められない点で問題が残る。前方部や造り出しが付く可能性も残した上で、ここでは円墳と考えておきたい。墳丘の高さは、西側の墳裾の最も低いところから測って、2.5m程となる。葺石・埴輪は認められない。

なお、1号墳と2号墳の間は、ほぼ一定に緩やかに傾斜する平坦な面となっている。この周囲の尾根線上の自然地形の部分では、このような平坦な部分は認められることから、古墳築造の際に削平されている可能性も考慮しておくべきであろう。

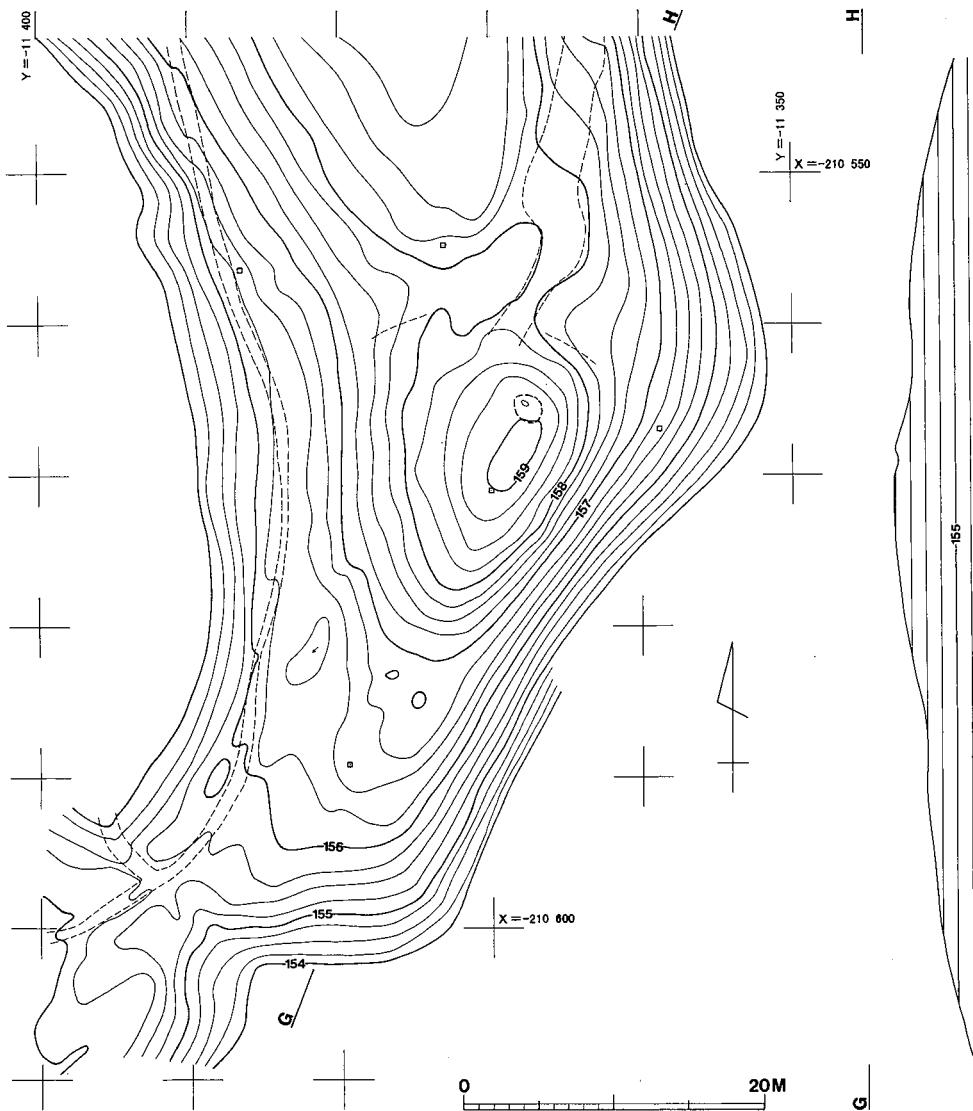


図10 夕向原2号墳測量図

4. 村田盆地における前方後円墳の変遷

今回の測量調査によって、夕向原1号墳は、後円部の墳裾のレベルが場所によって異なっていることが明確となった。東側の村田盆地側が低く、東側を大きく見せるための工夫と見なすことができ、村田盆地側をより意識して築造されていることは確実である。古峯神社古墳についても、同じ尾根線上に立地することから、同様に村田側を主に意識していたと考えて良いであろう。このことから、村田盆地を主要な基盤とする被葬者像が想定され、村田盆地に築造された前方後円墳と、一連の首長墓系列を構成する可能性が考えられる。そのため、村田盆地の他の前方後円墳との関係を検討することが必要であろう。

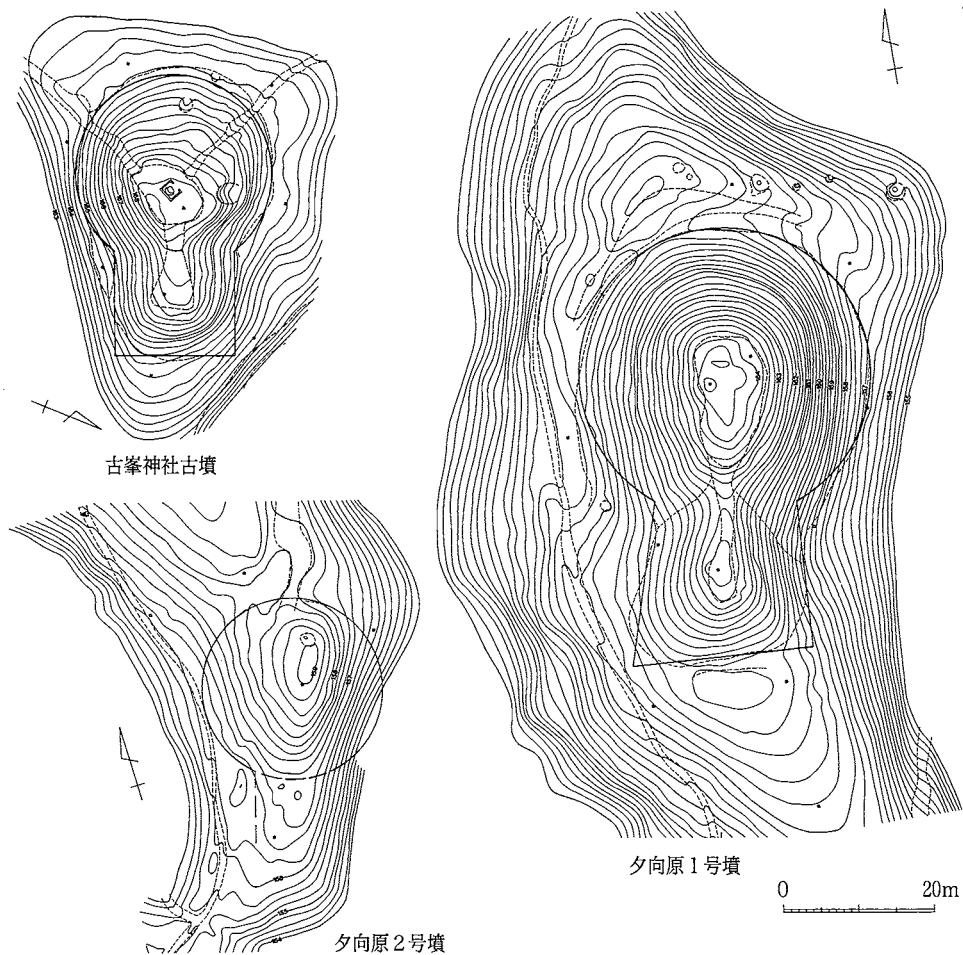


図11 古峯神社古墳・夕向原古墳群の墳形の推定復元

これまでに村田盆地では、前方後円墳と見なして良いか問題が残る嶋館古墳を含めると、合計5基の前方後円墳が確認されている。全て測量図面が公表されているので、図12にまとめて示した（註4）。この中で薬師堂古墳は、主軸長28mと小型の前方後円墳であり、他の前方後円墳とは規模の上での格差が大きく、同列には扱えないであろうし、墳丘の改変が著しく検討が難しい。この薬師堂古墳と嶋館古墳を除いた3基に、古峯神社古墳・夕向原1号墳をあわせて、その築造順序を検討してみたい。

これらの前方後円墳で、出土遺物が知られているのは愛宕山古墳の埴輪だけであり、それ以外は墳丘形態や外表施設の特徴から検討するしかない。なお、古墳の築造時期がある程度推定できるものについては、『前方後円墳集成』の共通編年を利用することとする（広瀬和雄 1991）。墳形や埴輪から、ある程度築造時期を推定できるものとしては、千塚山古墳と愛宕山古墳がある。

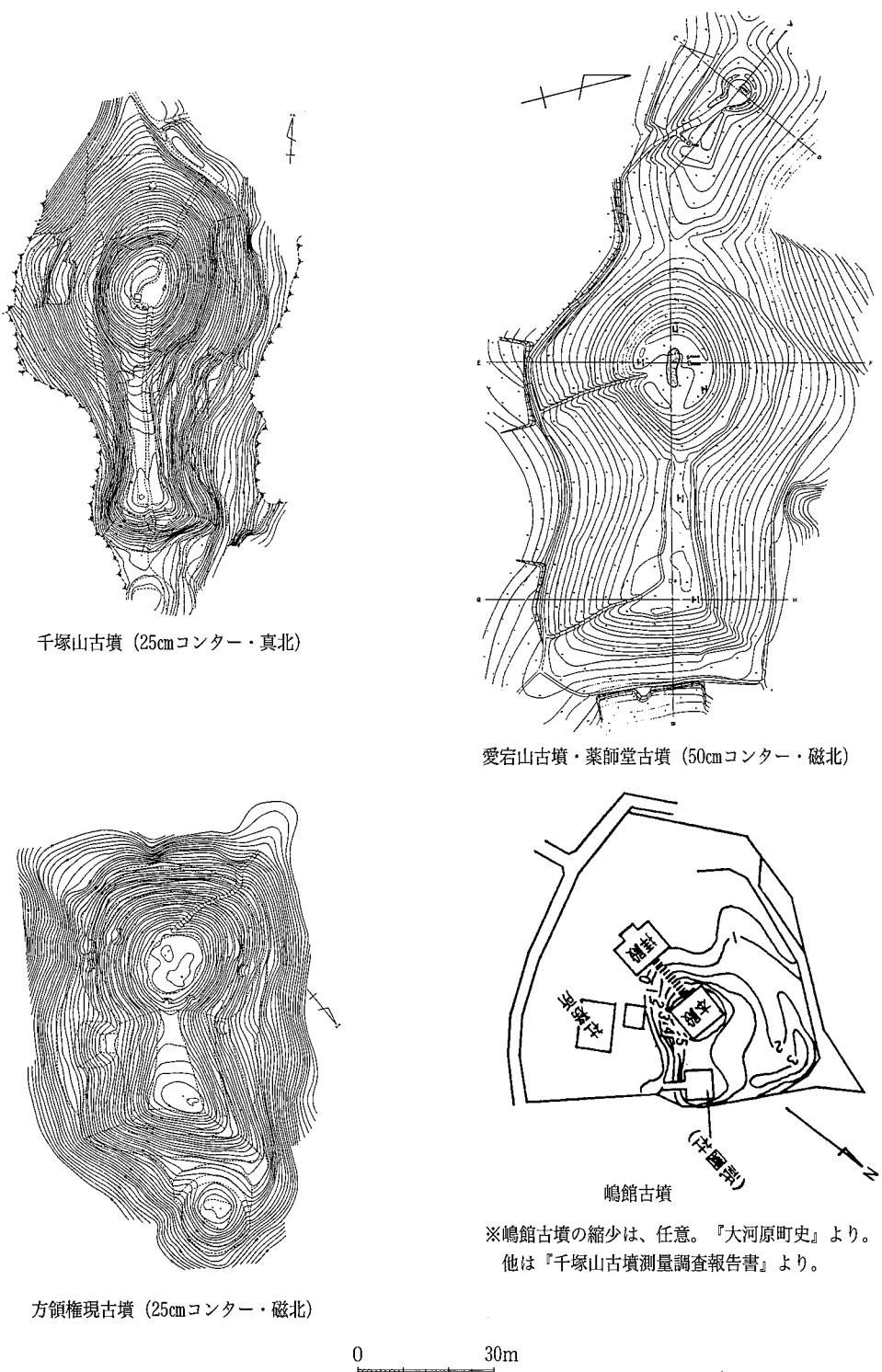


図12 村田町周辺の前方後円墳

千塚山古墳は、主軸長85mの前方後円墳で、測量調査報告書において、菊地芳朗によつて墳形の検討がなされている（菊地芳朗 1992）。墳形の大きな特徴は、前方部がバチ形を呈することである。段築は、存在したとしても、後円部の東側のみが2段になっていた可能性が高いことが指摘されている。前方部が確実にバチ形を呈する前方後円墳は、東北地方では他には知られていない。周辺に類似する墳形の古墳が存在するならば、その古墳が築造された際にもたらされた墳丘型式が、二次的に波及した場合も想定でき、築造時期が下る可能性も考えられるが、周辺に類例が認められないことから、その可能性はあまり考慮しなくとも良いだろう。したがって、その築造は前期でも前半の内に収まる可能性が高い。集成編年のⅠ期まで遡るか否かはおくとしても、Ⅱ期までには築造されたと考えて大過ないであろう。

愛宕山古墳は主軸長90mと、村田盆地のみならず、阿武隈川下流域で最大規模の前方後円墳で、段築・葺石・埴輪を伴う、東北地方では極めてまれな古墳である。2次タテハケ・有黒斑の円筒埴輪が採集されている（千塚山古墳測量調査団編 1992）。2次タテハケが認められ、2次ヨコハケの資料が確認されていないという点では、川西編年のⅠ期に相当するが（川西宏幸 1978）、関東地方や東北地方では、2次タテハケが遅くまで残る例が多いことを踏まえると、そのⅡ期以降の時期に並行すると考えられる。前方部の低い墳丘形態も合わせて考えると、中期まで下るとは考え難く、前期後半、すなわち集成編年のⅢ期ないしⅣ期に築造されたものとみなすのが妥当であろう。

方領権現古墳は、主軸長64mで、片側に造り出しを有する。後円部・前方部ともに2段築成であるが、葺石は確認されていない。造り出しが確認されている前方後円墳は、東北地方ではこの1例だけである。そのため、比較検討の材料に乏しく、詳細な築造時期を推定することは難しいが、造り出しの存在から、中期以降に下ることは確実である。前方部頂の高さが、後円部頂よりわずかに低いという点から、後期まで下る可能性は低いであろう。したがって、これら3古墳は、千塚山古墳→愛宕山古墳→方領権現古墳という順序で築造されたと考えられる。

問題は、今回報告した夕向原1号墳と古峯神社古墳の築造時期である。この両者も、東北地方での類例が見出し難い。夕向原1号墳・古峯神社古墳とも、前方部が短いのが特徴であるが、この点で他の3基の前方後円墳と異なっており、単純に比較することが難しい。また、古峯神社古墳では墳丘の流出により、夕向原1号墳は墳裾レベルが各所で異なっているため、墳形の正確な復元は、発掘調査で検証しないと難しい。このため、他地域の例との比較も簡単ではない。

そこで、後円部と前方部の高さの変化について検討してみたい。図13に、各古墳の主軸

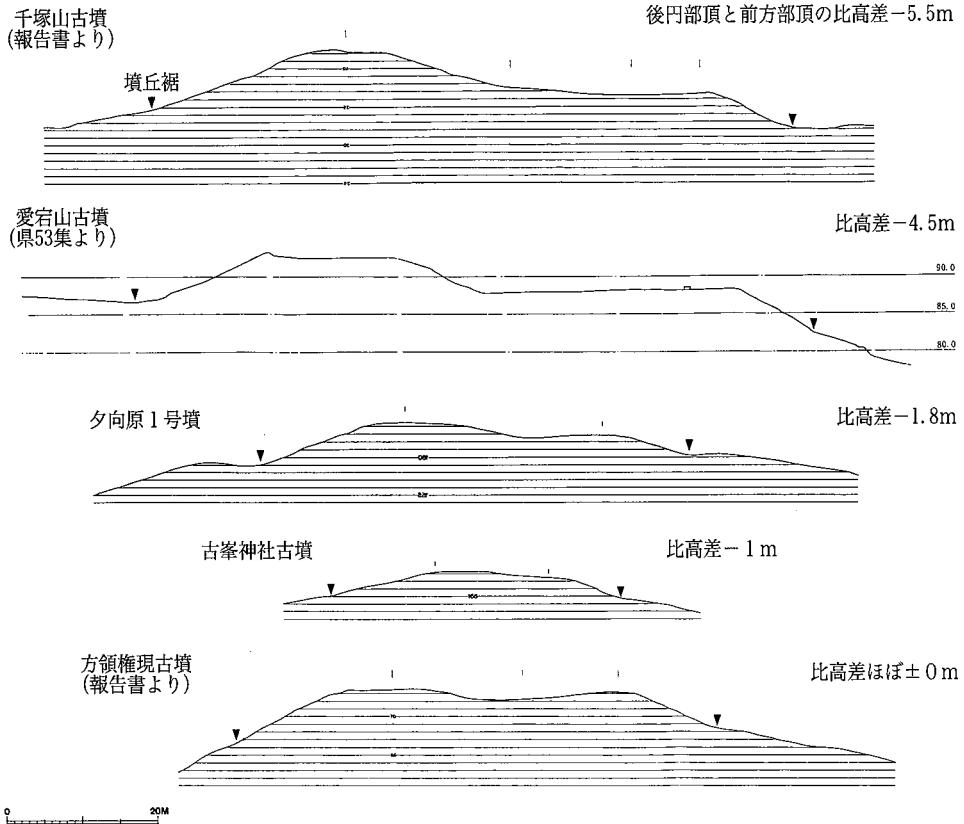


図13 主軸上の断面図の比較

方向での断面図を示した。方向を合わせるために、千塚山古墳と夕向原1号墳は、図面を反転している。主軸上の墳端のレベルが、後円部側が高いものもあれば、逆のものもあるため単純ではないが、図13の上から並べた順番で、前方部の高さが高くなっていく様子が見て取れる。前方部が新しくなるとともに発達していくという、一般的の傾向に照らせば、この順序で築造されていった可能性が考えられる。それぞれの古墳で、墳丘基底レベルのあり方が大きく異なっている上、墳形も大きく異なるため、この点のみで確定できる訳ではない。特に古峯神社古墳と方領権現古墳の前後関係については、古峯神社古墳の前方部が、開かず短い形状を示すため、同列に扱って良いか、疑問の残るところであり、確実性が低いかも知れない。しかし、この順序が大きく入れ替わることは考え難いであろう。

したがって、これら5基の前方後円墳の築造順序は、千塚山古墳→愛宕山古墳→夕向原1号墳→古峯神社古墳→方領権現古墳という順序が想定できる。発掘調査が全く行われていない現状では、それぞれの細かな築造時期については明確にはし得ないが、方領権現古墳の築造が中期の内に収まると考えて良いならば、前期から中期にかけて、この5基の前方後円墳は変遷していったと考えることができる。この期間に、途切れることなく次々と

築造が続いたと考えるには、数が少なすぎると思われるが、間に幾ばくかの空白期が存在するか否かについては、角田市の長泉寺裏山古墳や吉ノ内古墳（藤沢敦・大友喜助 1992）などの、阿武隈川下流域の他の前方後円墳を含めて、検討する必要があろう。

6. 結語

村田盆地の前方後円墳の変遷を追うと、それぞれの墳丘形態の違いが大きく、前後の前方後円墳の間で、相互の関係をとらえ難い。後円部径に対する前方部長の比率や、前方部の形状など、それぞれに個性的で、これらの古墳の間で直接的変化を追うことは困難である。このことは、一度採用された墳丘型式が、在地で変化していったものではない可能性を示す。それぞれの前方後円墳が築造される度に、新たな墳丘型式を取り入れた結果と考える方が、実態に即している。

それでは、一度前方後円墳を築造していれば、それに類する前方後円墳を築造することも可能なように思えるが、何故できなかつたのであろうか。古墳築造にあたっての技術的側面が、制約となっていた可能性も高い。それとともに、前方後円墳がすぐれた政治的な産物であるとするならば、前方後円墳に表現された政治的関係の特質が、背景に存在するとの想定も可能だろう。すなわち、首長が交代するごとに、近畿地方の政治的中枢や、それに連なる勢力との関係を、再確認することが必要とされた状況を背景に考えてみたい。言い換えるならば、そのような関係の再確認を経ることが前提になって、当地の首長の地位が確立されるのであって、当地域内部での地位の継承だけでは、首長の政治的地位が継承される構造にはなかつたという可能性を考えたい。この点については、墳丘型式のみで結論づけられるような問題ではないが、少なくとも前方後円墳の築造という点では、当地域の勢力が、それを自立的になしえなかつたということは、認めて良いであろう。

当地域と同様に、墳丘型式が次々と変わる地域も、全国的には多く存在する。一方、古墳時代前期でも、四国東半部のように地域独自の墳墓様式が確立している場合もある（北條芳隆 1999）。また、後期になると、埼玉県行田市の埼玉古墳群の長方形周溝に代表されるような、各地域独自の墳丘型式が安定して推移していく場合も、各地に多く見られるようになる。これらとの比較検討を進めて行くことによって、墳形の類似や相違に現された首長間の関係について、より明確にしていくことができるだろう。

なお本研究は、1995年度に筆者に対して交付された文部省科学研究費補助金「東北地方における古墳の変遷の基礎的研究」（奨励研究A、課題番号07710266）の成果の一部を含んでいる。

註

- 註 1 阿武隈川下流域といった場合、河口部の岩沼市・亘理町・山元町を含むべきであろうが、これらの地域は、仙台平野や福島県浜通り地方との関連で検討すべき地域と考えるため、ここでは対象に含めていない。
- 註 2 嶋館古墳は残丘上に立地しているが、古墳の南東側と北西側で、墳丘裾のレベルの違いが大きく、しかも高い側である北西側の墳裾が明瞭でない（図12参照）。そのため、墳丘裾のラインが、うまく回つていかず、前方後円墳と断定するには躊躇を覚える。下ノ内圓古墳は、既に完全に削平を受けているが、現在でも埴輪が採集される（千塚山古墳測量調査団編 1992）。埴輪の出土状況から前方後円墳の可能性が指摘されてるが（村田町史編纂委員会編 1977）、削平されてしまった現状で、前方後円墳と確定することは難しい。小塚古墳は、現存する円丘の南側に、周囲の水田より一段高く畠として利用されている部分があり、これが前方部の形状に似ているため、前方後円墳の可能性が指摘されている。ただし、前方後円墳とすると、主軸長120m以上となるが、前方部の高まりが50cm程度の高さしかない。全体の形状も含めて、それだけ大きな前方後円墳と見なすには疑問な点が多い。また、村田町村田字針生所在の針生古墳とされてるものは、自然の残丘と思われるため、ここでは取り上げない。
- 註 3 測量調査にあたっては、地主との折衝をはじめ調査の実施にあたって、村田町歴史みらい館と同館の高橋定光氏・石黒伸一朗氏、蔵王町教育委員会社会教育課と同課の佐藤洋一氏、龍泉院の佐藤正隆氏、佐々木安彦氏、藤原二郎氏に多大なご協力を得た。感謝申し上げる次第である。2ヶ年に渡る調査にあたっては、多数の方々の参加・協力を得たが、見学に来られた折りに作業を手伝って下さった方も多い。そのため、参加・協力者として、あわせて以下にご芳名を記し、感謝申し上げる次第である。
青山博樹・吾妻俊典・飯塚洋介・石田真・石堂祐子・伊藤典子・岩見和泰・大谷基・大本麻美・荻原研一・織茂麻木子・菊地芳朗・斎藤美穂・鈴木(高橋)朋子・高橋哲・高橋千晶・田原由男・羽石智治・早瀬亮介・氷見淳哉・藤原弘明・古川一明・松澤香理・松本和子・矢作征人
- 註 4 嶋館古墳の測量図は、『大河原町史』に掲載されているが、図面に縮尺が記載されていない。そのため図12では、筆者の略測値にもとづいて、他の古墳と縮尺がほぼ同じになるように調整した図面を掲載した。愛宕山古墳と薬師堂古墳の測量図は、宮城県が作成しており（宮城県教育委員会 1978）、図12に示したのは、この宮城県作成の図面に、レーダー探査とピン差し調査による主体部の推定位置を加えたものである（千塚山古墳測量調査団編 1992）。
- 註 5 愛宕山古墳の主体部については、レーダー探査とピン差し調査によって、現墳頂下10cmから50cm程のところに連続して石が存在し、それよりさらに深いところで床面の構造か副葬品の可能性のあるレーダー反射像が得られている（千塚山古墳測量調査団編 1992）。この点から、竪穴式石室の可能性を指摘したが、乱掘を受けた可能性があるものの、側壁の存在を示すようなレーダー反射像が得られておらず問題が残る。あるいは、宮崎県西都市の西都原13号墳のような（内藤虎次郎・今西龍 1918）、粘土櫛の上に礫を敷いたような構造を想定した方が良いかも知れない。

引用・参考文献

- 大河原町史編纂委員会編 1987 『大河原町史 通史編』
 片倉信郎ほか編 1976 『白石市史 別巻 考古資料編』白石市
 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 pp.1~70

20 阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）

- 菊地芳朗 1992 「墳丘の復元とそれに関する二・三の問題」『千塚山古墳測量調査報告書』宮城県村田町文化財調査報告書第11集 pp.17~25
- 藏王町史編さん委員会編 1987 『藏王町史 資料編I』藏王町
- 千塚山古墳測量調査団編 1992 『千塚山古墳測量調査報告書』宮城県村田町文化財調査報告書第11集
内藤虎次郎・今西龍 1918 「西都原古墳群調査報告」『宮崎縣史蹟調査報告』第三冊 pp.62~72 宮崎縣内務部
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』 pp.24~26 山川出版社
- 藤沢敦・大友喜助 1992 『西屋敷1号墳・吉ノ内1号墳発掘調査報告書』角田市文化財調査報告書第8集
- 藤沢 敦 1999 「阿武隈川下流域の古墳と社会」『考古学の方法』第2号 pp. 32~35 東北大学文学部考古学研究会
- 北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』 pp.205~229
- 宮城県教育委員会 1978 『宮城県文化財調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集
- 村田町史編纂委員会編 1977 『村田町史』宮城県村田町